Ⅱ. オンラインフォーラムの開催

（1）目的

・東横堀川の陸上・水上の活用における新たな価値や可能性を議論し、東横堀川が利活用可能な場所であることと、賑わい創出に向けた取り組みを広く周知する。
・ターゲットは主に地域、水辺利活用に関心のある事業者・団体・行政・専門家等とし、水辺での活動や事業展開などに関心を持つ新たなプレイヤーの発掘を行う。
・次年度以降につながる示唆を得る。

（2）実施概要

-1 テーマ・趣旨

「東横堀川から描く次世代のパブリック」

―「公共」を誰がどう担い、どのようにすれば、サステイナブルなかたちで「みんなが大切だと思っている価値」を守り育てていくことができるのか―

著書『次世代ガバメント~小さくて大きい政府のつくり方』で、いまのパブリックのあり方に根本的な問いを投げかけた若林恵さんをお迎えして、オンラインのトークイベントを開催します。

水都大阪・東横堀川では、次世代の水辺の日常風景・魅力づくりに向けて、地元まちづくり団体から生まれた一般社団法人が、20 年間の官民連携まちづくりをスタートします。都市の暮らしに新しい価値を生み出す水辺、パブリックスペースとは何か、今そのために何が必要か、みなさんと考えます。

-2 開催日時・手法

・開催日時：　2021 年 2 月 23 日（祝・火）14：00～16：00（2 時間）
・実施手法：　Web 会議サービス Zoom を利用したオンライン配信
・配信会場：　大阪産業創造館 6 階会議室 A・B

-3 参加者

・参加申込：　90 名〔定員 100 名〕

-4 登壇者

・ゲスト｜若林恵（黒鳥社コンテンツディレクター）
・コーディネーター｜佐久間康富（和歌山大学システム工学部・准教授）
・登壇｜杉本容子(（一社）水辺ラボ代表理事)

（3）実施記録

東横堀川から描く次世代のパブリック

ゲスト｜若林恵(黒鳥社　コンテンツディレクター)
コーディネーター｜佐久間康富(和歌山大学システム工学部・准教授)
登壇｜杉本容子(一般社団法人水辺ラボ　代表理事)

（佐久間）
本日は、公共空間・官民連携のあり方というのがここ数年大きく変わってきている中、東横堀川を題材に若林さんをお迎えして、新たなパブリックの可能性について議論したいと思います。まずは杉本さんから話題提供として、これまでの取り組みや、現状の課題などご紹介お願いします。

（杉本）
東横堀川は阪神高速の真下を流れる川です。パルテノン神殿と紹介されたこともありますが、上に高速道路が覆っているため、10 数年前は「暗い・汚い・怖い」と言われていました。ここを拠点に、東横堀川水辺再生協議会（e-よこ会）をつくって、水辺のお掃除や、水辺を活用するイベント「e-よこ逍遥」などを進めてきました。
パブリックに関わる取り組みをご紹介します。まず、高速道路を屋根として活かした全天候型の船ポートをつくろうと。これは 2008 年、河川法の規制緩和が進んでいない時でしたが、まずはやってみようと仮桟橋をつくりました。やってみると「意外に安全だね」「意外にいけるね」とわかりました。
また、大阪の街の魅力を発信している「大阪ええはがき研究会」が、本町橋の欄干に絵葉書を展示しました。橋の活用は道路管理者や警察との協議が必要になりますが、実は 1 ヶ月前から欄干の外側に展示を試み、何も落ちなかったという実績を見せることで安全性を証明し、展示を実現させました。
さらに水都大阪 2009 では、川沿いの公園に護岸高さまで底上げした川舞台をつくりました。4〜5 畳の舞台で、能、和楽器ワークショップ、会議利用など、53 日間で約 13 団体に使っていただきました。
水都大阪 2009 では、行き止まりで閉鎖されている川沿いの未開設公園部分でピクニックも開きました。隣の建物との間のフェンスも外して、まちとの一体活用をはかる社会実験です。
そういう活動を続ける中で、2015 年に本町橋のたもとに船着場が整備されました。また同年、川に向かって人が座れる階段スペースができました。ここは民地ですが、総合設計制度を使った建替えの際に、水辺活性化のために人が座れる空間にしてほしいと働きかけをしたところ、快くオープンスペースにしていただけました。本町橋近くの公園は、護岸が取り払われ過ごしやすい空間に再整備されました。
最後に現在進行形のプロジェクト「β 本町橋」をご紹介します。昨年の冬に本町橋のたもとに水辺の拠点を開設・運営する事業者の公募が出ました。これまで e-よこ会はボランティア活動のみでしたが、ここを拠点にもっと積極的に関わっていこうとこの公募に応募して採択され、絶賛工事中という状況です。
では現場を生中継で紹介します。

（廣井）
現場の廣井です。本町橋のすぐ北側に公園と船着場があります。β 本町橋はその公園内にあります。木造 2 階建て、280 平米弱ほど建物です。目の前が東横堀川で、β 本町橋から 3 歩で SUP に乗ったり、

船に乗ることができます。1 階は船や SUP の待合室のほかシェアキッチンがあり、テイクアウトなどの販売を想定しています。2 階は道路面と繋がっています。ガラス張りで前に東横堀川がドーンと見える、気持ちのいい建物になると思います。

（杉本）
β 本町橋は今夏オープン予定です。こんな感じで、私たちはチャレンジと失敗を繰り返しながら、少しずつ前に進んでいます。若林さんの著書で共感した点を 2 点、話題提供としてあげたいと思います。
１つ目は公共性って何？みんなって誰？ということです。e-よこ会は地域組織なので、割と管理者や周囲に理解していただきやすいのですが、β 本町橋の運営は、一般社団法人水辺ラボという法人をつくり担います。するとメンバーや活動内容があまり変わらなくても「この人たち誰？」となります。また、β 本町橋は運営しながら整備費を回収していく事業スキームですが、それは収益事業になってしまわないかという議論になります。河川管理・公園管理の中で、どう仕組みをつくるかの過渡期です。
もう１つ、東横堀川の水門は、船が通るには 3 日前までに FAX 又はメールで申請が必要です。こういったことを、デジタルテクノロジーを使うことでもちろん安全面に注意しながらスムーズにできないかという、デジタルテクノロジーの可能性についてヒントがほしいです。

（佐久間）
杉本さんから公共性って何？みんなって誰？ということとデジタルテクノロジーの可能性というふたつのお題をいただきました。若林さんから聞きたいところはありますか。

（若林）
頑張っていることは伝わるのですが、何のためにやっているのかがうまく伝わってきませんでした。これは一体何のための実験で、それによって参加者や近隣にどう変化があったか、さらにはまちや水辺の活性化がなぜ必要なのかという話がないと、行きあたりばったりに見えてしまいます。
イギリスだと行政が関わる事業ではロジックモデルをつくります。A から A’もしくは B へと、別の地点に動かすためには、こう動く方が望ましいという仮説を立て、何が阻害要因か、どうしたらその要因をひっくり返せるか、そのために必要なアウトプットは何か、と考えます。そのアウトプットに必要なインプットが予算や人員になります。イギリスでは 2 年に 1 回、そのロジックモデルに対する監査もあると聞いています。そこではアウトプットよりそれによってもたらされる変化が重要と考えます。変化が起きないのであればやる意味はないし、その変化の設定を明確にしないと誰のためかということも明確にならない。そこをクリアにしないと、ぼやっとした定義論に陥る可能性があります。

（杉本）
おっしゃる通りだと思います。ロジックモデルの評価のスパンについてもう少し伺いたいです。

（若林）
プロジェクトやレベルで全然違うと思います。さっきの 2 年に 1 回は、個々のプロジェクトに対する査定ではなく、ロジックモデルの運用自体の査定になります。行政サービスはモノができれば合格ではなく、それによって何がもたらされるのかを考えなければならない。また、例えば水辺ラボにとっても何をもたらすのか、いわゆるステイクホルダーにとっての変化も設計する必要があります。いずかの主体

がマイナスのアウトカムになるのであれば、プロジェクトの設計が間違っていたことになります。

（佐久間）
2 年に 1 度の査定はどなたがするのでしょうか。

（若林）
それはロジックモデルのプロです。ちゃんと使っているかどうか、プロジェクト自体がフェアに行われているか、プロジェクトのフレームワークの査定もあるようです。聞いた話では、ちゃんとトレーニングもあるそうです。これがきちんと書けないと物事が動きませんが、書ける人が少ない。なぜなら、ユーザー側に何が起こるかという視点でつくらなければならないからです。まちの困りごとをどういう仕組みで解決するかということもありますが、そもそも取り組みたい課題は何かということが真ん中に置かれるべきと感じています。

（佐久間）
KPI が大事とか、エビデンスに基づいて政策を決めることが大事といわれますが、背景にあるロジックモデルがミソで、ロジックモデルに基づいて、誰に何を伝えるのかが重要というご指摘ですね。

（若林）
みんなが世の中に不満がないということであれば何もしなくていいのですが。水辺やまちの活性化とは、結局まちの経済のことだと思います。日本が 30 年後何で食っているのか想像できませんが、働き方もどんどん変わってきます。コミュニティの再生は、防災など地域の安全の話とともに、近隣のコミュニティの人をどうやって食べさせるのかという話とセットだと思います。地域で自立的な経済、ある種のスモールビジネスをどうつくっていくか。そのプラットフォームが必要な場合、β 本町橋にできるお店が雇用の場となる。そういう立て付けが必要だと思います。

（杉本）
そもそも β 本町橋をやろうと思ったきっかけは、この公募が出されたとき、他都市のカフェ事業者が入ってきた場合、地元と一緒にやっていけるのか、また、カフェがたくさんある都心で、そこと水辺がなぜ競合しなければならないのかということが、自分たちの中で整理できなかったからです。私たちはまちづくりから出発しているので、経済的なことは得意ではないですが、本能的に都心の地産地消というかそこのハブになろうと思いました。

（若林）
まちづくりの人が、経済が不得意なのはなぜだろうといつも不思議です。例えば土木行政は、公共事業自体を経済政策と考えますが、そうではなく、架けた橋の上で、どうやってこっちとあっちの人を交流させるか。そのために用意するインセンティブが経済です。デジタルトランスフォーメーション（DX）分野でも土木と同じ考え方をしてしまっていますが、4 年前の前大統領選でヒラリーが出したテクノロジー＆イノベーションアジェンダでは、IT を経済政策の真ん中におき、きちんと IT インフラを整備することが、みんなが起業しやすくなったり、有色人種や女性に対する支援プログラムができることに繋がると書かれていました。ペインに対するサービスを探すというスタンスで考えていくべきです。

（杉本）
スタートアップ支援もありますね。今は飲食店を始めたいと思っても、土地代が高くて気軽に始められる状況ではないので、β 本町橋の一部を腰掛け的に使ってもらうことを考えています。週に 1 回だけ使えるとか 3 年だけ使えるとかして公共空間の役割を果たせるといいなと思っています。

（若林）
公共の場の優位性は人が集まることなので、スタート時に新しい人にお披露目するには格好の場所です。そこで美味いと知られれば、出資が集まったり、路面店に展開していったり拡がります。そういうプラットフォームになるとよいと思います。スモールビジネスをどれだけたくさんつくれるかが重要です。

（佐久間）
公共空間におけるスモールビジネスを通じた経済政策の可能性をご指摘いただきました。
かつて右上がりだった時代から人口減少になり、何をどうしていいのかわからない状況の中、プラットフォームをつくったり色々試すことは政策的に状況的に可能と思いますが、ビジネス自体を政策的につくるのは難しいのではと思います。スモールビジネスのつくり方については、いかがでしょうか。

（若林）
イギリスの事例をいくつか紹介します。
ポップブリクソン、これは駅前再開発でつくられた複合施設です。1 階は飲食、上にはスタートアップのインキュベーションがあります。移民が多くちょっと危険なまちと見なされていたエリアですが、今はここ目掛けて人が集まり、ここで人気店になってロンドンに 3、4 店舗構えた例もでてきています。この中のコミュニティラジオには学生インターンがたくさんいて、音楽業界への就職に繋がっています。音楽好きやダンスが好きな子が、アーティストになれなくても、アーティストを支える色々な仕事があることを知り、現場で学ぶことができる、夢を見られない若い子の受け皿になっています。
また、フューチャーバブラーズというプロジェクトがあります。イギリスでは今、音楽業界の都市と地方の格差が問題になっています。小さい田舎まちのレコード屋やラジオ局などのネットワークを使って、地方のミュージシャンを発掘し、その子たちの才能を開発していくという、一種のミュージシャンのインキュベーションプログラムです。他にもアーツカウンシルや著作権団体がもつ財団、BBC みたいなメディアプラットフォームなどが、いろんな形でミュージシャンの支援をきめ細かく行っています。
トータルリフレッシュメントセンター、これは民間の事例ですが、いろんなミュージシャンが集まる音楽のコワーキングスペースで、この 10 年間イギリスのジャズシーンを牽引しています。ここに集まる人は、この場所の意義、公共性に対し高い意識を持って活動しています。民間側も公共の感度をあげていく必要があると思います。
イギリスのグリーンフォレストローバーズは、サスティナビリティをテーマにしたフットボールチームで、選手とコーチともにヴィーガン、スタジアムの電気は全て再生可能エネルギー、スタジアムは天然芝生、スタジアムで提供される食事も全部ヴィーガンというチームです。国連と一緒にスポーツとサスティナビリティというテーマでイニシアチブをとってやっています。
民間でも行政でもどちらでもいいのですが、今、SDGs やダイバーシティなど新しい社会課題を解決していくのに、文化セクターのようなものが、ドライバーとして機能しようとしています。

（佐久間）
ありがとうございます。新しい価値観を切り開いていく必要があるというお話をいただきました。杉本さんに、本町橋のロジックモデルと言いますか、何を目指してやっているのか教えてください。

（杉本）
まちづくりに求められることは変わってきていますが、まだそういった現場は少なく、またユーザーの視点で考えたときにも、そういったことは事前に教えられるものでもないので、若い人と一緒に皆で動かしながら、じわじわ育つということができればと思います。先ほど現場中継をした廣井さんは元々この界隈で働いていた OL でしたが、e-よこ会の活動を通して育ち、この夏からは β 本町橋の女将のような立場になるので、これが一つのエビデンスです。また、目指すところは正直まだわかっておらず、やりながら見出していけるかなと思っています。

（若林）
方便でもいいので、わかりやすい課題解決の設定があると、そこにお金を出したいという企業がいると思います。例えば都市の移動のありようが見直されているという視点から、CO_2 の排出を極端に減らした水運を目指す。ということような、割と大きいことに乗せておいた方がいいと思います。

（杉本）
企業と公共空間の関わりしろがこれまで少なかったので、そのハブにもなりたいと思っています。

（佐久間）
若林さんからも本町橋のミッションを新たに掲げていただいたのかなと思います。
では、質問をご紹介します。β 本町橋はどのような目的で作られたのかという質問と、評価指標の事例を教えてくださいというものがきています。

（杉本）
β 本町橋は、「水辺の賑わい創出」を目的に公募されました。最終的には水辺がいろんな人が自由に使えて、誇りに思えるような場所になればいいなと個人的には思っています。

（若林）
海外の事例ですが、貧しい人が受けられる支援プログラムが使われていないという場合。原因を探ると資料が役所にしか置いていないから。そう言った時に情報を居住エリアに置くという対策が考えられます。日本でいうとマイナンバーが普及しないという問題がありますが、そもそもみんなが使わない本当の理由を分析することから始めるべきです。ロジックモデルに関しては、東大の馬場隆明氏の著書「未来を実装する」に、イノベーティブなアイデアがあっても実装できなければ意味がないが、実装ということは簡単ではない、実装すること自体がイノベーティブであるということが書かれています。どう実装していくか、僕自身まだ解はないのですが、取り組まなければならないと思っています。

（佐久間）
ありがとうございました。最後にお二人から一言ずつお願いします。

（杉本）
β 本町橋は実装に向けて動いているのですが、こういう場がいっぱいあるべきだと思いました。ぜひ若林さんも大阪へ来てください。

（若林）
ぜひ。最後に、DX は何のためにするのかについて。今まで企業の中でプロジェクトがサイロ化して、トップダウンでしか決められなくなっていたことが、DX によって自動で決められるようになります。それによって既存の仕事がなくなると心配する方もいますが、仕事はなくならず、より複雑な横断的なプロジェクトに人は取り組まなければならなくなります。これまでのトップダウンの原理では動かない、合意形成も簡単にはいかないプロジェクトが動き出します。とはいえ、明日からやってと言ってもできないですから、小さい所で経験を積みながら、焦らずできればと思います。

（佐久間）
ありがとうございました。β 本町橋のホットな様子に対し、若林さんからはロジックモデルがないのではとご指摘いただいてひやっとする場面がありましたが、道路や河川を利用していこうという動きがある昨今、なぜそれをやるのか、楽しそうだよねと納得している所もあったけれども、誰に何を届けるのかというロジックモデルをちゃんと考えないといけないんじゃないかという指摘が投げかけられたと思います。公共空間を使ってスモールビジネスをどうつくっていくのか、異質なものを混ぜ合わせてプレイヤーをどう育てていくのかのお話では、トライアンドエラーを繰り返していくのが公共空間のあり方ではないかという示唆をいただきました。
あとは最後に β 本町橋が企業や若者のハブになるという話がありましたが、今回のフォーラムがそのキックオフになると思います。今後 β 本町橋がわいわい集まって楽しい議論をして、トレーニングをしたり、ビジネスが生まれるようなプラットフォームになるイメージが沸いたのかなと思います。以上を、まとめとさせていただきます。本日はありがとうございました。